「家庭教育をどう模索するか」

—夏休み、親子での体験の場を通して何が育ったか その1—

園長 高杉美稚子

最近の新聞の記事や報道を見ても、何かゆらいできているという、漠然とした不安感があります。

殺人、事故、事件、目覆うような内容ばかりです。食事を取りながらニュースを見ることはタブーですが、それだけでなく内容の凄惨さにチャンネルをつける気もなくなってきます。今年も夏の悲しいニュースが続きました。では、何をどうして言ったらいいのでしょうか。

幼稚園教育では、心の教育を第一に考えながら、集団教育の中での一人一人の子どもの育ちの姿をどう導いていったらいいのか、昼夜を問わず、模索しています。可能な限り、子ども達の望ましい発達の為の人的、物的教育環境を整えているつもりです。でも、やはり、根本にあり、最も大切で、私たちが手の届かない範囲、それは、家庭教育であろうと思います。

家庭教育で何が変わってきたかと言いますと、最近の子ども達のままごとを見て感じることは、掃除、洗濯、調理の場面が減って、食事の場面と、電子レンジでチンする場面、電話をかける場面、おめかしして出かける場面が増えていることです。

家事労働の時間は昭和の時期に比べると、断然と減ってきているのでしょう。その分、親子での体を使った家事労働の共同作業の時間も減り、その結果、子どもへの対応を言葉だけでしようとして、言葉だけでは気持ちを推し量れなくなって、親子共々、精神的に疲れ果て、子育てが辛くなってきているのではないのでしょうか。

ある調査で、母親は結婚するまで、自由だった時間、行動、お金が制約され自分の人生を振り返った時、孤独に陥っている。

父親は、仕事上ストレスが多いので、家庭ではせめてリラックスしたいと考えているのに、子どもへの対応を迫られ、子どもと向き合わずに、子どもの「みかけだけの理解者」となって、母親をますます、育児ノイローゼへと向かわせているといわれています。

この育児不安が、過期待や過干渉へと更に向かわせています。更に虐待にも繋がっています。

虐待はネグレクト（育児放棄、無視）や暴力だけではなく今や、過期待や過干渉も虐待だといわれています。なぜ過期待や過干渉が虐待になるか、何度もおはなししてきていることですが、今一度、振り返って見ましょう。

過干渉、過期待がなぜ怖いのか

過干渉、過期待で育った人間は期待に答えようとして、自分の気持ちを押し殺しているのが甘えたい時に甘えて育ってない。甘えたい時に甘えてないと人は傷つく。大人になっても甘えの言葉が拒否されたり、甘えの態度が拒絶されたりされると傷つく。

このような人はいくつになってもおとなになりきれず、甘えの欲求を持つ。甘えの欲求を持った人は傷つきやすい。人の言動にひどく怒りやすい。ちょっとした一言で機嫌が変わり、怒り出す。

それはなぜか、甘えの欲求を相手との関係で満たそうとするからである。甘えの欲求を相手との関係で満たそうとしている人が相手の人に何かするのは相手の為ではない。相手から感謝されたいのである。それを相手か感

謝しないときは激怒する。甘えの欲求を満たされていない人が人の為になにかするのは、相手の為ではなく、自分の欲求を満たすためだからである。

感謝されると思っていたことが期待はずれに終わった。それは相手は拒否してはいないが、感謝されたいと思っていた人からすれば、相手に拒否されたことと同じである。相手が不機嫌ということはそういう人にとっては責められていると感じる。だから、大人になってからも相手の不機嫌にいつもおびえ続けるのである。だから人にノーサンキューが言えなくなる。このように他人から責められていると思って育てている人は心のそこに、知らず知らずのうちに、憎しみの感情をためていく。

過干渉、過期待で育てるということは、親が子どもに自分の甘えの欲求を満たすためにしているのだから、子どもは親への甘えの欲求を否定され、親の期待にこたえようとして、親のために親が喜ぶことをする。それは、逆に親から愛を求められている事になり、親子の役割逆転が起り、子どもは親に愛を与え続けることになり愛を搾取されていることになる。

親がいろいろな事をする。それは全て、子どもの反応に期待しているからである。見返りを求めない時はいい。でも親はつい見返りを求めてしまう。だから、子どもは親の期待する反応をしなければならぬ。これによる子どもの心の傷は想像を超えるものがある。

そして、親は子どもに感謝を求める。子どもが感謝しないと親は自分の甘えの気持ちが傷つき怒る。そうした体験を積み重ねていけば、子どもは何を言う時も相手の気持ちを傷つけないように気を使うようになる。

世話をしてもらいたい、聞いてもらいたい、甘えたい、触れてもらいたいなど相手に何かをしてもらいたいというのが幼児願望である。この願望が満たされて人は能動的になる。

でも愛されなかった人は、能動的にならなければと無理に前向きな姿勢を示す。自分が幼児的願望を持っているのに、他人に幼児的願望を背負わされた人は悲惨である。これは心理的には地獄である。

小さい頃、周囲の人から過大に期待され、心配のあまりに過大に干渉された人は、甘えたいのに甘えられず、見捨てられることを恐れて「こんな私でも愛して」とありのままの自分をさらけ出すこともできず、心のそこに憎しみ、恨み、敵意、恐怖、不安といったあらゆるマイナスの感情がたまる。

十分に自分をさらけ出して、いい子を演じなくても、十分に愛されたという感情を持つ事ができたなら、自分を愛することも、他人を愛することも簡単にできる。

周囲の人から過大に期待され、心配のあまりに過大に干渉された人は、周りの他人からは愛されて育ってきたように写る。でも、親の愛をいつも確認しながら、おびえて生きてきた子どもは、いつも愛され邸内と感じる。あるがままの自分では愛されないと無理をする。

そして、この心の苦しみを味わっている人は自分では苦しさの原因がわからない。周りの目からは愛されていると写るだけに、すべてを自分の責任にしてしまう。悪いのは自分ではなく、親の育て方だった。そして親もそのように育てなければならぬ環境で育ったと思えば、親も自分も許せる。そこから世界が変わる。でもこれに気付くには長い時間がかかる。

更に不幸なことに周囲の人、特に見返りのない、無条件の十分な愛を受けて育った人には理解してもらえない。「だれか私の気持ちをわかって」という理解されない気持ち、これが一番大きな問題であり、心の葛藤でエネルギーを消耗し、その人は生きることにいつか疲れてしまうのである。そして生きることになぜ疲れたかも理解されない。そしてうつになり閉じこもる。

次に不幸な人はそれによって周囲の人を責めている。幸せを幸せと感じることが出来ない。心のそこの憎しみ

が消えていないから、幸せといえない。

自分が幸せと認めたら、もう周囲の人を責められない。自分の不幸を誇示する人は自分の心の中に、憎しみがあって人を責めるのである。愚痴やいいわけ、悪口は「私は不幸だ」という表現で、自分をわかってくれない周囲に対する憎しみを表現した言葉である。

周囲に向かって私は悔しい、にくいと言えない人がその代わりに不幸ですと愚痴をいう。それが相手と対立しないで憎しみを晴らす方法なのである。

幼兒的願望が満たされず、愛情飢餓感が強い人は相手と対立できないからである。相手がにくい、でも相手に嫌われたくないので、いえない。その時に私は不幸だというのである。

過大に干渉された人は、生まれてきた時から、まっすぐな竹筒に入れられて育った蛇と同じである。その蛇はどうなるであろうか。長いこと、自分のあるがままの本性を否定されて生きてくれば、生命力がなくなるのは当たり前である。これをしたいというものが何一つなくて生きてしまうのである。

これを指示待ち症候群と呼んだりもする。

自分はいつもどうしてこんな目にあうのという答えは、自分は「こう生きよう」と自分の頭で考えることがなかったからである。人に認めて貰いたいと言うことはばかりに気をとられて生きてきたからである。

「自分がどうしたいか」という目的の実現の為に頑張ったのではない。人に気に入られようとして自分を欺いて頑張ったのである。それで生命力のある人になれといっても無理である。

親にこのような育て方をされた子どもは、どうなるであろうか。そして、だからこそ家庭教育の模索の先はどこにあるのか、続きは次回です。